詩編第６編の黙想：「主はわたしの願いを聞かれた」（2020 年 4 月 25 日用　TM）

修道院では毎週一週間で詩編 150 編を読むそうです。6 日間で計算すれば、一日 25 編祈ることになります。私たちは修道僧ではありません。しかし、「主よ、いつまでですか」という嘆きは、数千年間にわたる信仰者の叫びです。今朝は詩篇第６編を取り上げます。まず、詩編６編をお読みください。

この詩を読んで印象深いことは、心身ともに病み、衰え、神に向かって恵みと憐れみを求めて叫んでいる詩人の姿です。苦しみは魂だけに留まらず、「わたしの骨は悩み苦しんでいます」（口語訳 2 節、新共同訳 3 節）と言い、8 節では「目は衰えで行き、…老いてしまった」とあります。深い悩み苦しみが体に来てしまっている。それは「わたし」や「あなた」だけのことではなく、信仰者の共通の経験なのです。もしそういう経験がないというのであれば、それは、不条理に悩む隣人を見ておらず、自分自身の惨めさに気がついていない「鈍さ」のゆえかも知れません。「悔い改め」という要素は、この詩篇自体には語られてはいないのですが、この詩はいつしか、７つの「悔い改めの詩篇」の中の１つとしてレント（四旬節あるいは受難節）に読まれるようになりました。

「主よ、あなたの怒りをもって、わたしを責めず、あなたの激しい怒りをもって、わたしを懲らしめないでください」(2 節)。「怒り」「激しい怒り」そして、３節後半に「あなたはいつまでお怒りになるのですか」と３回「怒り」という言葉が登場します。神が怒って、世界と自分を責めておられると感じることがあります。「怒り」は正義と愛が無視されていると感じられるときの当然の感情です。ですから「怒り」の感情を抑圧しないようにしましょう。

しかし、私たちは神ではないのですから、本当に聖なる怒りを発することもできないし、そうする必要もないのです。嘆きの感情を自らに許し、怒りと嘆きを感じつつも、「主よ、憐れんでください、主よ、赦してください。主よ、立ち帰り/わたしの魂を助け出してください。主よ、あなたの慈しみにふさわしく/わたしを救ってください」と祈りましょう。

そこから方向転換が始まっています。詩篇の祈り手は、「主はわたしの嘆きを聞き、主はわたしの祈りを受け入れてくださる」と言います。口語訳は「主はわたしの泣く声を聞かれた。主はわたしの願いを聞かれた。主はわたしの祈りをうけられる」と翻訳しています。ヘブライ語は完了形で書かれているので、この翻訳の方が良いかも知れません。

新共同訳では６節に目を移しましょう。「死の国へ行けば、だれもあなたの名を唱えず/陰府に入れば/だれもあなたに感謝をささげません。」主イエスが復活された以上、死を恐れることはありません。しかし、神が定めた時がくるまで急いで死んではいけません。39 歳で殉教の死を遂げたボンヘッファーの言葉：「人は生とこの地を愛し、それらを失ってしまえば、すべてを失い、すべてが終わってしまうように思える時にだけ、死者の復活と新しい世界を信じることが可能である」（Wiederstand und Ergebung, 226)。「死においては、あなたを覚えるものはなく、陰府においては、だれがあなたをほめたたえることができましょうか」と嘆くものだけが、「主は、わたしの泣く声を聞かれた。主はわたしの願いを聞かれた。主はわたしの祈りをうけられる」と言うことができるし、死者とその家族を真実に悼むことができるのではないでしょうか。